

日本語母語話者の〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択 —選択率と二種類の許容度調査から—

杉村 泰

DOI: 10.18999/stul.36.91

1. はじめに

本稿は例(1)や例(2)のような日本語のいわゆる¹〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について、「を」と「から」の「二者択一テスト」、「を」および「から」の「〇×式正誤判断テスト」、「を」および「から」の「4段階評定尺度テスト」(SD法)の三種類のアンケート調査を利用して、日本語母語話者の選択率と許容度の関係について論じたものである。

- (1) 彼は7時に家()出て、大学に行った。
- (2) 彼はアメリカの有名大学()出た。

「二者択一テスト」は選択率の観点から「を」と「から」のどちらを使いやすいかを見るもの、「〇×式正誤判断テスト」は「言える—言えない」の2段階で許容度を測るもの、「4段階評定尺度テスト」は「正しい—少し不自然—かなり不自然—誤り」の4段階で許容度を測るものである。

2. 先行研究

日本語の〈起点〉を表す「を」と「から」の選択について、三宅(1995, 1996)では例(3)と例(4)を比較して、「意志的にコントロールされない移動の場合は、ヲ格を使うことができない」という規則があることを指摘している。

¹本稿では「を」は第一義的には〈働きかけの対象〉を標示すると考えるため、「いわゆる」という表現を用いる。

(3) 煙が煙突{*を/から}出た。(無意志)

(4) 太郎が部屋{を/から}出た。(意志)

その上で、三宅(1995)は例(4)のように意志的にコントロールされる場合について、「特に起点を強調したい場合に、カラ格が選択される」(p.71)と述べている。三宅(1995)の指摘は基本的に正しいが、これだけでは例(5)のように意志的にコントロールされるにもかかわらず「から」が不自然になる場合の説明ができない。

(5) 私は毎日7時に家{を/?から}出る。

これに対し、楠本(2002)は「家を出る」、「大学を卒業する」、「席を立つ」等いわゆる動作の起点を表す表現について、「これらの「を」格文は主体が属していたものからの離脱を表し、さらに「私ごと」の延長として離脱する目的が暗示される(例えば、「家を出て会社へ行く」等)というように学習者に教えるならば、「を」格の存在が理解出来、正しい使い方が出来るようになるであろう」(p.10)と論じている。

これらの先行研究を受け、杉村(2005, 2016a, 2016b, 2020)では、「二者択一テスト」、「〇×式正誤判断テスト」や「複数選択テスト」²を利用して、日本語母語話者は例(6)のように「次のステージ」への移動を表す場合には「を」を選択しやすく、例(7)のようにその場からの離脱に焦点があり、「次のステージ」への移動には着目していない場合には「から」を選択しやすいことを指摘した。

(6) 私は毎日7時に家を出る。(家庭生活→会社や学校での活動)

(7) 夫が知らない女の家から出てきた。(女の家にいる→?)

これを受け、本稿では「二者択一テスト」、「〇×式正誤判断テスト」、「4段階評定尺度テスト」の3種類のテストを利用して、日本語話者の持つ「を」と「から」の選択意識を視覚的に明示する。

3. 調査の概要

² 「を」と「から」のうち言えるものを全て選ばせるテスト。

本稿では以下の 14 問を例にして、「場所を出る」と「場所から出る」の選択を見る。³

1. 私は毎日7時に家{を/から}出る。
2. 彼はアメリカの有名大学{を/から}出た。
3. 母は夕食の支度をするために4時にデパート{を/から}出た。
4. 彼女は大学{を/から}出て、まっすぐ家に帰った。
5. 彼女は家{を/から}出て一人暮らしを始めた。
6. 彼はヤクザの〇〇組{を/から}出る決心をした。
7. 彼は学歴詐称が見つかって、大学{を/から}出るようになった。
8. 彼は刑務所{を/から}出て、すぐに捕まった。
9. 彼女は裏門{を/から}出て、すぐに車にはねられた。
10. 地震でつぶれたビル{を/から}出た。
11. 先生がいたずらをしている学生に、「教室{を/から}出なさい」と言った。
12. 警察が犯人に、「そのビル{を/から}出ろ」と言った。
13. 犯人は逃げる時、裏口{を/から}出てきた。
14. 夫が知らない女の家{を/から}出てきたのを見た。

上記 14 問について、以下の①～④のアンケート調査を実施した。

① 「を」と「から」の二者択一テスト

(形式) 次の文の()に格助詞「を」、「から」のうち正しいと思う方を一つ入れて下さい。

1. 私は毎日7時に家()出る。(など全 14 問)

(被験者) 一回目: 名古屋大学生 58 人(2004 年 11 月 18 日)⁴

二回目: 名古屋大学生 118 人(2015 年 11 月 17 日～12 月 8 日)⁵

②-1 「を」の〇×式正誤判断テスト⁶

³ 実際のアンケート調査では 1、2、11、5、7、4、3、12、13、6、8、10、9、14 の順に並べた。

⁴ 杉村(2005)で行った調査。

⁵ 杉村(2016b)で行った調査。

⁶ 杉村(2016b)で行った調査。

(形式) 次の文が正しいと思えば○を、誤っていると思えば×を()の中に入れなさい。

1. 私は毎日7時に家を出る。() (など全 14 問)

(被験者) 名古屋大学生 58 人(2015 年 10 月 1 日)

②-2 「から」の○×式正誤判断テスト⁷

(形式) 次の文が正しいと思えば○を、誤っていると思えば×を()の中に入れなさい。

1. 私は毎日7時に家から出る。() (など全 14 問)

(被験者) 名古屋大学生 60 人(2015 年 10 月 2~6 日)

③-1 「を」の4段階評定尺度テスト

(形式) 次の文の許容性について、4(正しい)、3(少し不自然)、2(かなり不自然)、1(誤り)の4段階で判断して、該当する数字に○をつけてください。

1. 私は毎日7時に家を出る。(など全 14 問)

4 3 2 1
正しい |————|————|————| 誤り

(被験者) 名古屋大学生 58 人(2015 年 10 月 8 日)

③-2 「から」の4段階評定尺度テスト

(形式) 次の文の許容性について、4(正しい)、3(少し不自然)、2(かなり不自然)、1(誤り)の4段階で判断して、該当する数字に○をつけてください。

1. 私は毎日7時に家から出る。(など全 14 問)

4 3 2 1
正しい |————|————|————| 誤り

(被験者) 名古屋大学生 60 人(2015 年 10 月 9~20 日)

以上の調査結果をまとめると表1のようになる。

⁷ 杉村(2016b)で行った調査。

表1 「～を出る」と「から出る」に関する調査結果(日本人)

| テストの種類 調査項目 | 二択一テスト | | | | ○×テスト | | 4段階 評定尺度テスト | | | | | | | | | |
|--------------------------------------|--------|------|------|--------|-------|-------|-------------|------|------------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 一回目 | | 二回目 | | を | から | 「を」 | | | | 「から」 | | | | 平均 | |
| | 選択率(%) | を | から | 選択率(%) | | | 各尺度の選択率(%) | 平均 | 各尺度の選択率(%) | 平均 | | | | | | |
| | | を | から | 許容度(%) | 4 | 3 | 2 | 1 | 4 | 3 | 2 | 1 | | | | |
| 1. 私は毎日7時に家()出る。 | 100.0 | 0.0 | 95.8 | 4.2 | 100.0 | 38.3 | 96.6 | 1.7 | 1.7 | 0.0 | 3.95 | 18.3 | 50.0 | 20.0 | 11.7 | 2.70 |
| 2. 彼はアメリカの有名大学()出た。 | 100.0 | 0.0 | 98.3 | 1.7 | 96.6 | 21.7 | 70.7 | 25.9 | 3.4 | 0.0 | 3.67 | 3.3 | 28.3 | 31.7 | 36.7 | 1.95 |
| 3. 母は夕食の支度をするために4時にデパート()出た。 | 89.7 | 10.3 | 90.7 | 9.3 | 96.6 | 50.0 | 53.4 | 37.9 | 8.6 | 0.0 | 3.45 | 28.3 | 33.3 | 25.0 | 13.3 | 2.72 |
| 4. 彼女は大学()出て、まっすぐ家に帰った。 | 87.9 | 12.1 | 83.1 | 16.9 | 91.4 | 55.0 | 72.4 | 20.7 | 3.4 | 3.4 | 3.62 | 33.3 | 38.3 | 15.0 | 13.3 | 2.87 |
| 5. 彼女は家()出て一人暮らしを始めた。 | 86.2 | 13.8 | 91.5 | 8.5 | 96.6 | 46.7 | 69.0 | 25.9 | 3.4 | 1.7 | 3.62 | 25.0 | 48.3 | 16.7 | 10.0 | 2.84 |
| 6. 彼はヤクザの〇〇組()出る決心をした。 | 84.5 | 15.5 | 77.1 | 22.9 | 81.0 | 70.0 | 44.8 | 25.9 | 25.9 | 3.4 | 3.12 | 50.0 | 28.3 | 16.7 | 5.0 | 3.18 |
| 7. 彼は学歴詐称が見つかって、大学()出るようになった。 | 67.2 | 32.8 | 77.1 | 22.9 | 51.7 | 40.0 | 15.5 | 24.1 | 41.4 | 19.0 | 2.36 | 15.0 | 41.7 | 28.3 | 15.0 | 2.52 |
| 8. 彼は刑務所()出て、すぐに捕まった。 | 65.5 | 34.5 | 79.7 | 20.3 | 98.3 | 76.7 | 67.2 | 24.1 | 8.6 | 0.0 | 3.59 | 55.0 | 23.3 | 15.0 | 6.7 | 3.21 |
| 9. 彼女は裏門()出て、すぐに車にはねられた。 | 44.8 | 55.2 | 55.9 | 44.1 | 94.8 | 86.7 | 58.6 | 27.6 | 10.3 | 3.4 | 3.41 | 70.0 | 18.3 | 10.0 | 1.7 | 3.51 |
| 10. 地震でつぶれたビル()出た。 | 12.1 | 87.9 | 17.8 | 82.2 | 56.9 | 91.7 | 20.7 | 34.5 | 27.6 | 17.2 | 2.59 | 81.7 | 13.3 | 5.0 | 0.0 | 3.70 |
| 11. 先生がいたずらをしている学生に、「教室()出なさい」と言った。 | 8.6 | 91.4 | 11.0 | 89.0 | 62.1 | 95.0 | 48.3 | 25.9 | 20.7 | 5.2 | 3.17 | 96.7 | 3.3 | 0.0 | 0.0 | 3.90 |
| 12. 警察が犯人に、「そのビル()出ろ」と言った。 | 8.6 | 91.4 | 9.3 | 90.7 | 48.3 | 100.0 | 17.2 | 19.0 | 32.8 | 31.0 | 2.22 | 90.0 | 6.7 | 1.7 | 1.7 | 3.79 |
| 13. 犯人は逃げる時、裏口()出てきた。 | 8.6 | 91.4 | 0.0 | 100.0 | 22.4 | 96.7 | 17.2 | 12.1 | 24.1 | 46.6 | 2.00 | 90.0 | 10.0 | 0.0 | 0.0 | 3.84 |
| 14. 夫が知らない女の子の家()出てきたのを見た。 | 6.9 | 93.1 | 2.5 | 97.5 | 32.8 | 100.0 | 19.0 | 12.1 | 22.4 | 46.6 | 2.03 | 95.0 | 5.0 | 0.0 | 0.0 | 3.89 |

4. 二者択一テストの結果

まず「を」と「から」の二者択一テスト(3節の①)の結果から見る。このテストは被験者に 14 問の「～()出る」文を提示し、それぞれ「を」と「から」のうち正しいと思うものを一つ選んでもらうものである。迷ってもよりよいと思う方を一つだけ選んでもらった。このテストは一回目(2004 年)と一回目(2015 年)の二回行った。その結果を図1に示す。図1は各テストにおいて、被験者全体に占める「を」の選択者の割合を示したものである。

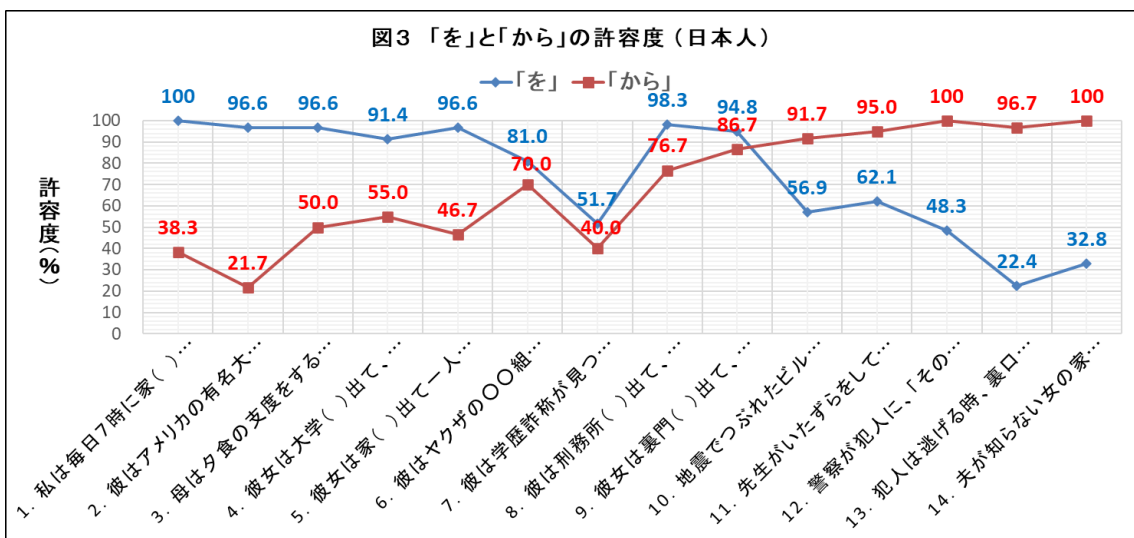
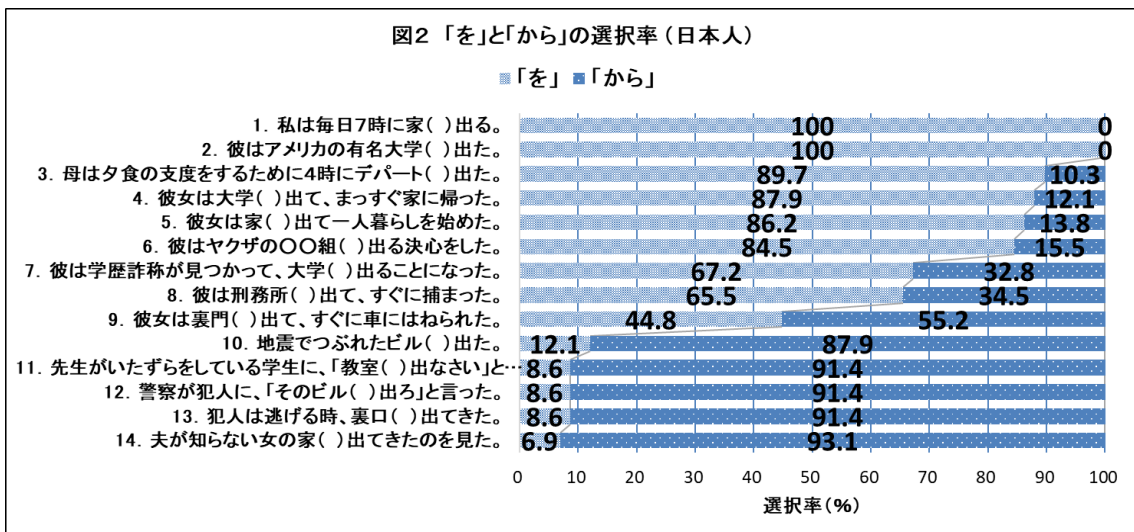
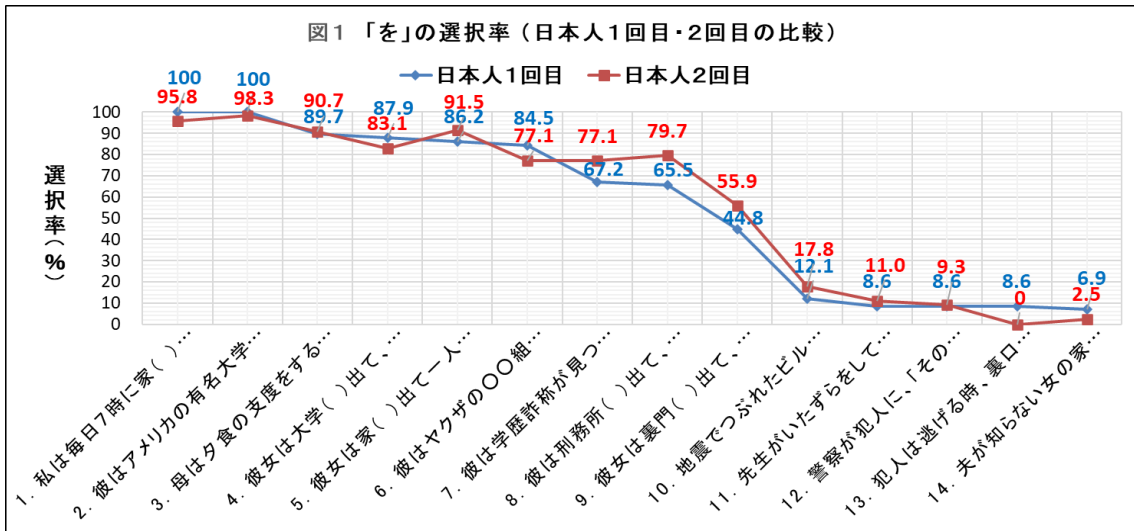
これを見ると、「を」と「から」の選択は二回ともほぼ同じであることが分かる。このことから、一回目も二回目も偶然選択率がこうなったわけではなく、日本語話者の頭の中にこのような選択意識が存在していると考えられる。以下、「を」と「から」の選択については一回目の結果をもとに論じることとする。

ここで一回目の結果を「を」の選択率が高いものから順に並べると図2のようになる。これを見ると、杉村(2005)で指摘したように、「次のステージ」への移動を表す場合には「を」が選択されやすく、そうでない場合には「から」が選択されやすいことが分かる。

5. O×式正誤判断テストの結果

次に、「を」と「から」のO×式正誤判断テスト(3節の②-1、②-2)の結果を見る。このテストは被験者に 14 問の「～を出る」文または「～から出る」文を提示し、それぞれ正しいと思えば○を、誤っていると思えば×を付けてもらうものである。迷っても○か×のどちらか一つを選んでもらった。その結果を図3に示す。図3は各テストにおいて、被験者全体に占める「を」または「から」が言える(○)と答えた人の割合を示したものである。本稿ではこの割合を被験者の平均的な「許容度」と見なすこととする。

これを図1や図2と比べると、全体的に「を」の選択率が高いものは「を」の許容度も高く、「から」の選択率が高いものは「から」の許容度も高くなっている。また、「を」の選択率が高い設問 1～5 では「から」より「を」の許容度の方が 30 ポイント以上高く、「から」の選択率が高い設問 10～14 では「を」より「から」の許容度の方が 30 ポイント以上高く、中間の設問 6～9 では「を」と「から」の許容度の差が 20 ポイント以下になっている。このように「を」と「から」の許容度に差があれば選択も高い方に傾き、差が小さいとどちらも選択されやすくなっている。なお、設問7で「を」と「から」の許容度がどちらも 50%前後と中程度になる理由はよく分からない。



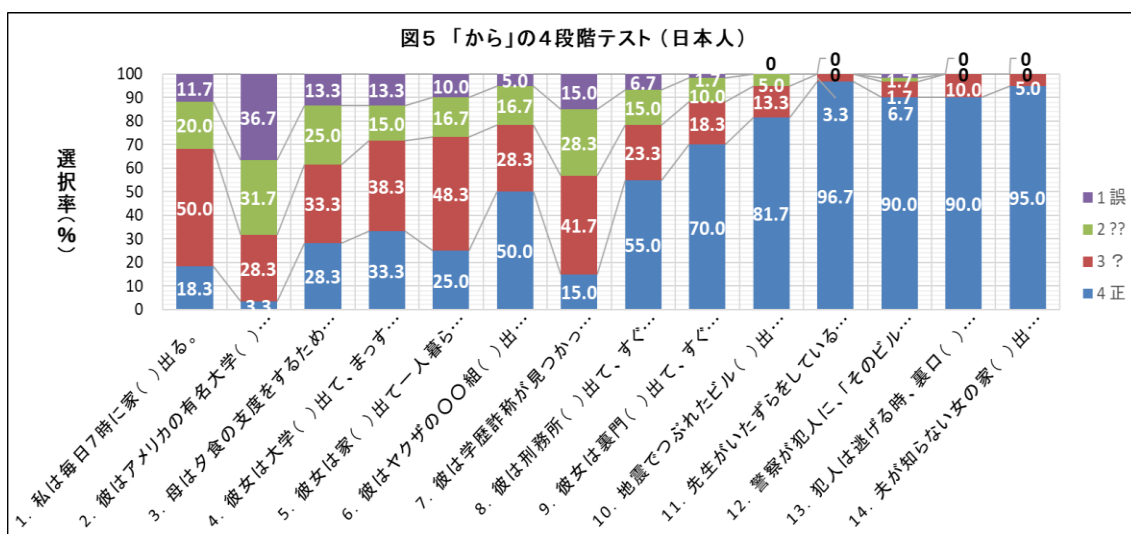
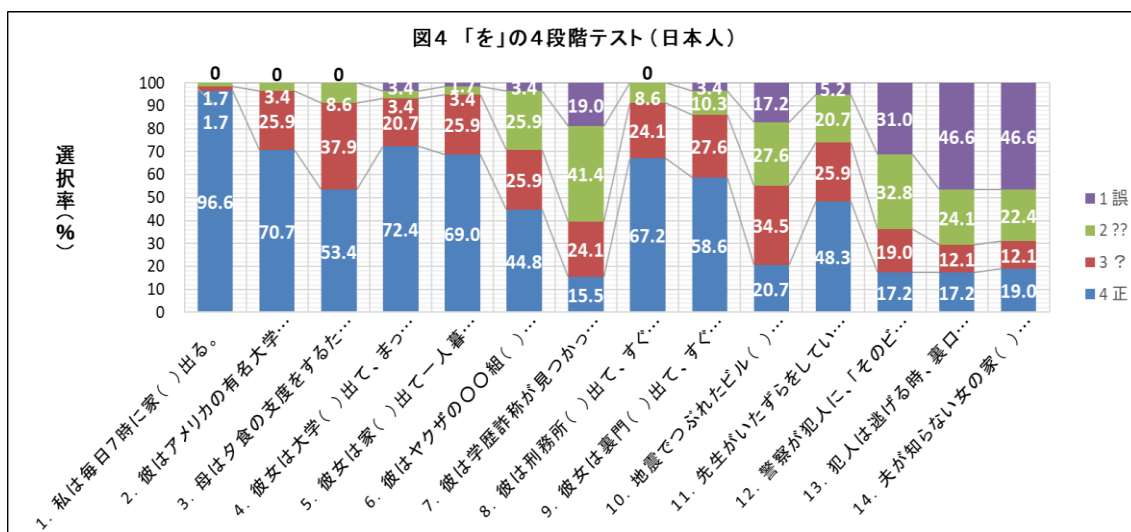
6. 4段階評定尺度テストの結果

次に、「を」と「から」の4段階評定尺度テスト(3節の③-1、③-2)の結果を見る。このテストは被験者に14問の「～を出る」文または「～から出る」文を提示し、それぞれ「4(正しい)」、「3(少し不自然)」、「2(かなり不自然)」、「1(誤り)」の4段階で許容性を判断してもらうものである。先の〇×式正誤判断テストが大まかに「言える」、「言えない」の2段階で許容性を判断させるものであるのに対し、こちらは中間段階を含んで4段階で許容性を判断させるものであるという違いがある。その結果を図4および図5に示す。図4と図5は各テストにおいて、被験者全体に占める「4(正しい)」、「3(少し不自然)」、「2(かなり不自然)」、「1(誤り)」の割合を示したものである。

図4を見ると、「を」は図2で選択率が高いものは「4」の割合が高く、選択率の低いものは「1」の割合が高くなっている。しかし、中間部分ではそうはなっていない。一方、図5を見ると、「から」は設問7を除き、選択率が高いものほど「4」の割合が高くなっている。また、「から」は設問2を除いてどの設問も「1」の割合が15%以下と少ない。このことから、設問2の他は、選択率が低いものでも「から」が使えなくはないことが伺われる。

ところで、設問11は「先生が学生に教室()出ろと言った」という場面、設問12は「警察が犯人にビル()出ろと言った」という場面、どちらも似た場面である。しかし「4」の割合は、「から」の場合はどちらも90%以上であるのに対し、「を」の場合は設問11では48.3%、設問12では17.2%と差がある。これは先の図3で、「から」の許容度はどちらも90%以上であったのに対し、「を」の許容度は設問11では62.1%、設問12では48.3%と差があったのと軌を一にしている。設問11と設問12は、いずれも「を」の選択率は8.6%(図2)と同じであるが、話し手の意識としては、設問11の方が「を」の許容性を高く感じているのである。これは杉村(2016b)で論じたように、設問11のように話し手と移動者が同じ領域(教室の中)にいと、動作主が話し手の目の前で移動し、その場所を起点としてだけでなく、移動の経路としても捉えることができるため、相対的に「を」の許容度が上がり、設問12のように話し手と移動者が異なる領域(ビルの内外)にいと、その場所を起点としてのみ捉えやすくなるため、相対的に「を」の許容度が下がるのではないかと考えられる。

なお、例7は「を」も「から」も「4」の割合が低く、どちらの許容度も低くなっている。しかし、筆者の語感ではどちらも言えそうな気がする。この点については今後の課題とする。



7. 三種類の調査の対比

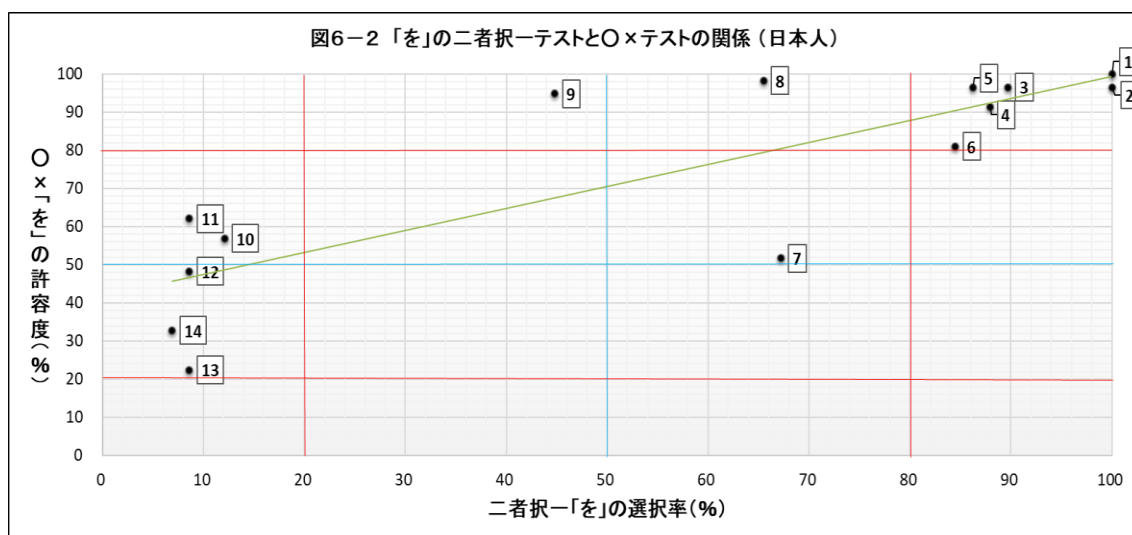
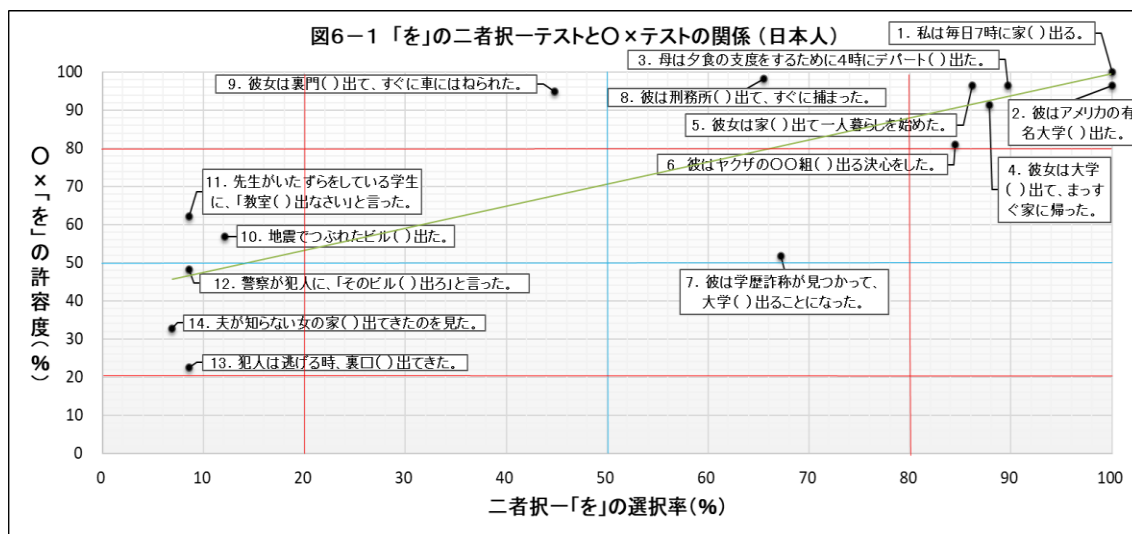
本節では散布図を利用して「二者択一テストと〇×テスト」、「二者択一テストと4段階評定尺度テスト」、「〇×テストと4段階評定尺度テスト」の順に2つずつ調査結果を対比する。4段階評定尺度テストは各被験者の答えた「1」～「4」の数字を平均したものを示す。⁸ 図 6-1～11-2 の散布図において各グラフの左下から右上に伸びる線は線形近似曲線である。以下、図〇-1 は設問文を入れたもので、図〇-2 は各点が見やすいように設問文を省いたものである。

⁸ 本テストは順序尺度を見るものであり、間隔尺度や比例尺度ではないが、平均することにより、各設問間の許容度の違いを擬似的に見ることができると思われる。

7.1 「を」の二者択一テストと〇×テストの関係

図 6-1、6-2 は「を」の二者択一テストと〇×テストの関係を示したものである。これを見ると、設問 1~6 のように「を」の選択率が 80%以上と高いものは、許容度も 80%以上と高くなっているが、設問 10~14 のように「を」の選択率が 20%以下と低いものは、許容度が 20~70%の間に広く分布している。後者の場合、「を」の許容度が中程度でも、次に見る「から」の許容度が 90%以上と高いため、「を」の選択率が低くなっていると考えられる。

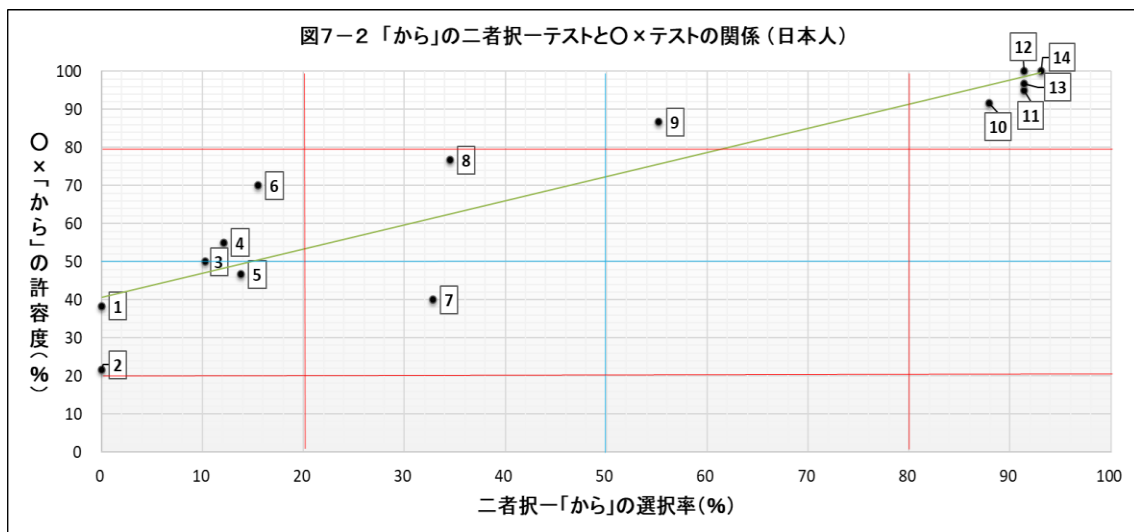
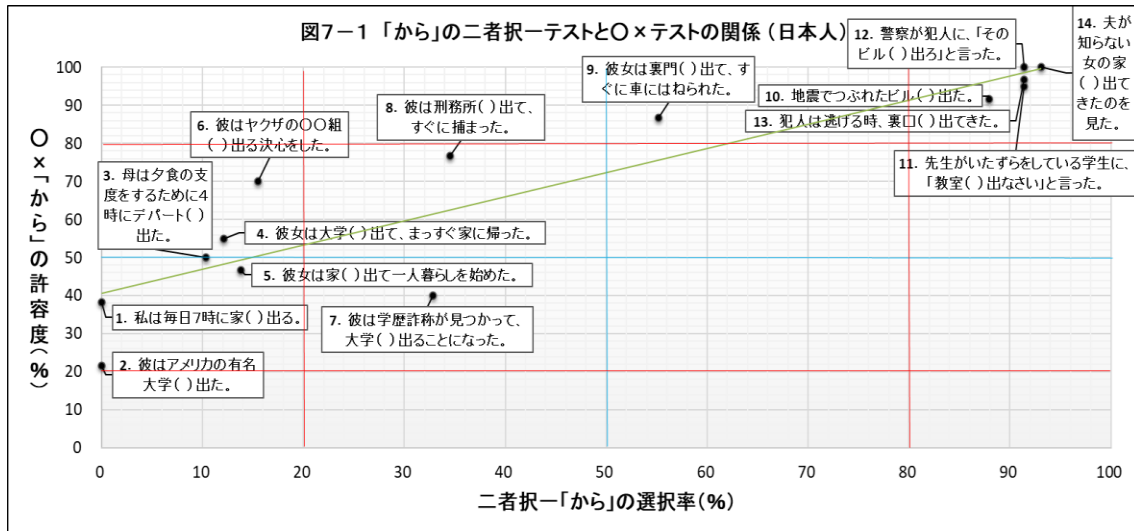
また、設問 7~9 のように「を」の選択率が中程度のものは、近似曲線から少し離れている。このうち設問 7 は許容度が中程度で、設問 8 と 9 は許容度が高くなっている。設問 7 は次に見る「から」の許容度も中程度であり、設問 8 と 9 は「から」の許容度も高いため、選択率が中程度になっていると考えられる。



7.2 「から」の二者択一テストと〇×テストの関係

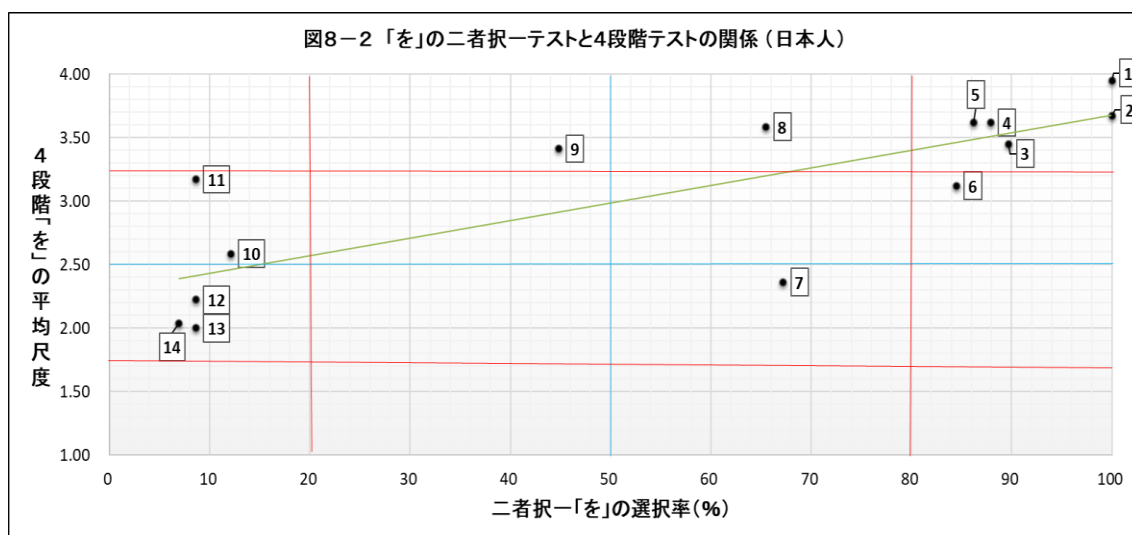
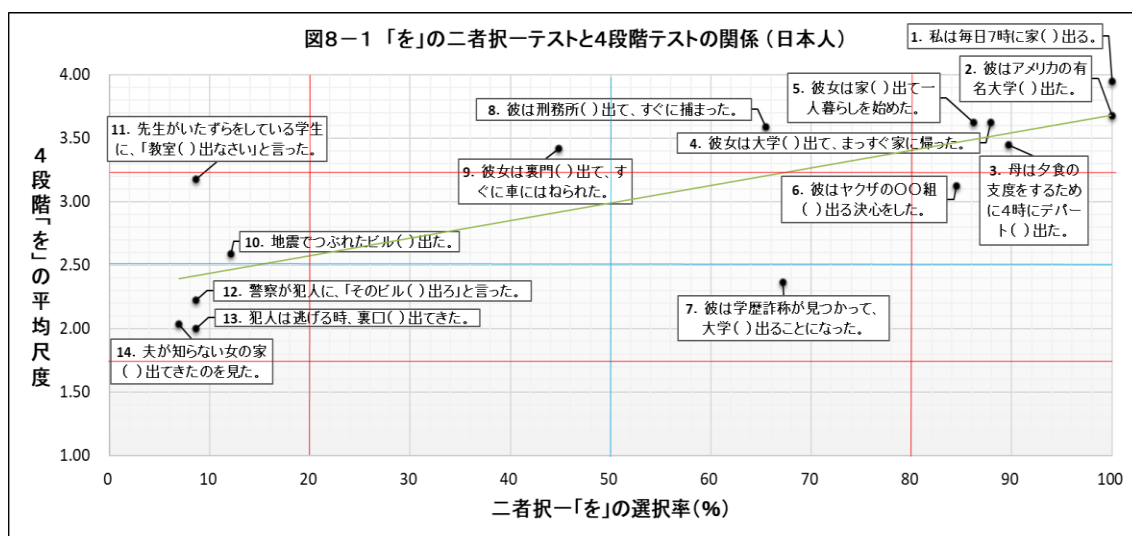
図 7-1、7-2 は「から」の二者択一テストと〇×テストの関係を示したものである。これを見ると、設問 10～14 のように「から」の選択率が 80%以上と高いものは、許容度も 90%以上と高くなっているが、設問 1～6 のように「から」の選択率が 20%以下と低いものは、許容度が 20～70%の間に広く分布している。後者の場合、「から」の許容度が中程度でも、先に見た「を」の許容度が 80%以上と高いため、「から」の選択率が低くなっていると考えられる。

また、設問 7～9 のように「から」の選択率が中程度のものは、先の「を」と同様に、近似曲線から少し離れている。このうち設問 7 は許容度が中程度で、設問 8 と 9 は許容度が高くなっている。設問 7 は先に見た「を」の許容度も中程度であり、設問 8 と 9 は「を」の許容度も高いため、選択率が中程度になっていると考えられる。



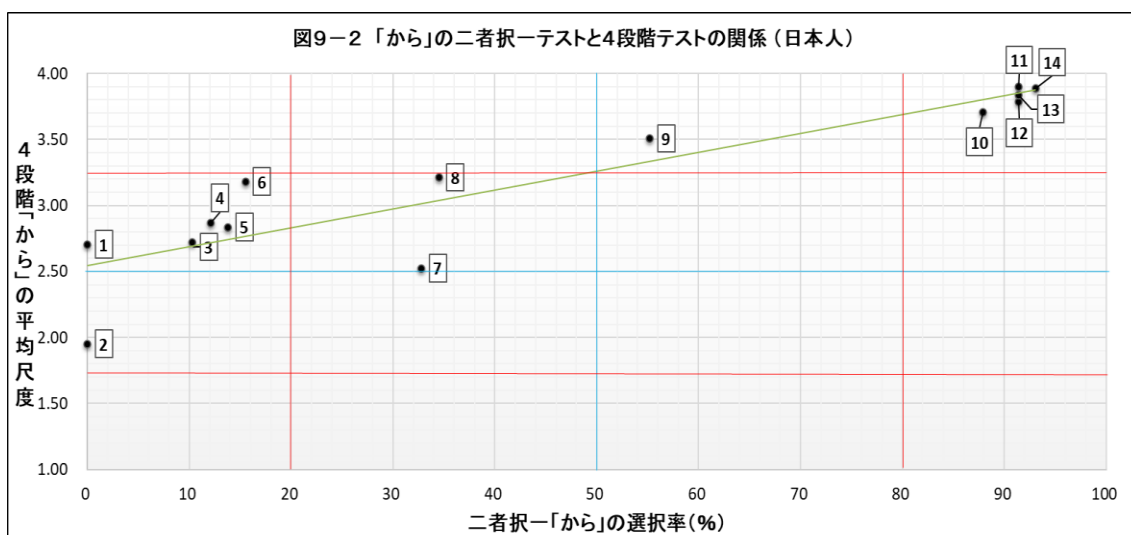
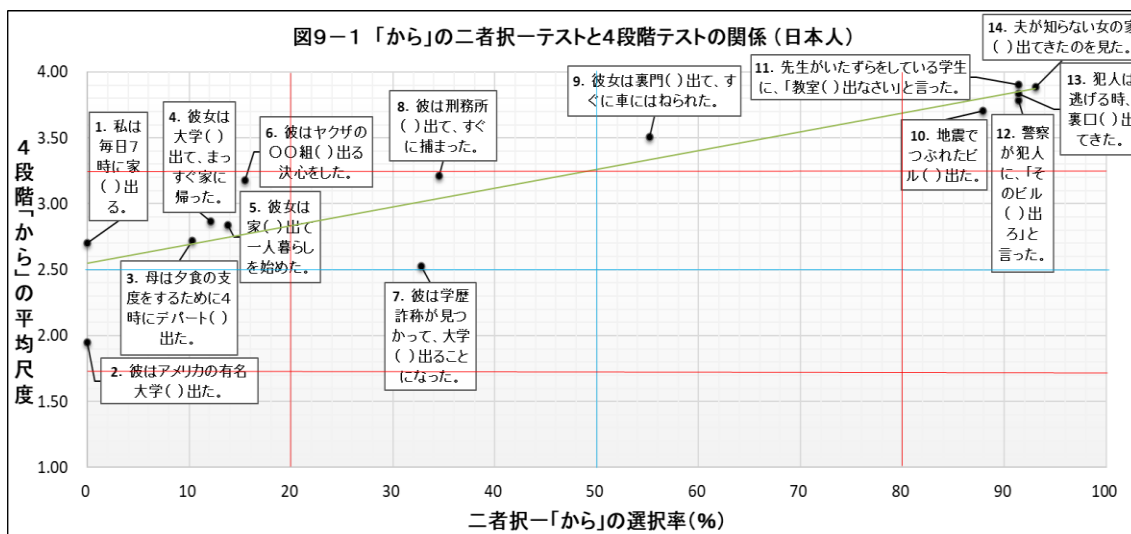
7.3 「を」の二者択一テストと4段階評定尺度テストの関係

図 8-1、8-2 は「を」の二者択一テストと4段階評定尺度テストの関係を示したものである。これを見ると、図 6-1、6-2 とほぼ同じような傾向を示していることが分かる。このことから、「正しい」、「少し不自然」、「かなり不自然」、「誤り」のように細かな許容度を見るのではなく、「正しい」、「誤り」のように大まかな許容度を見るのであれば、○×テストでも4段階評定尺度テストでもあまり変わらないことが分かる。



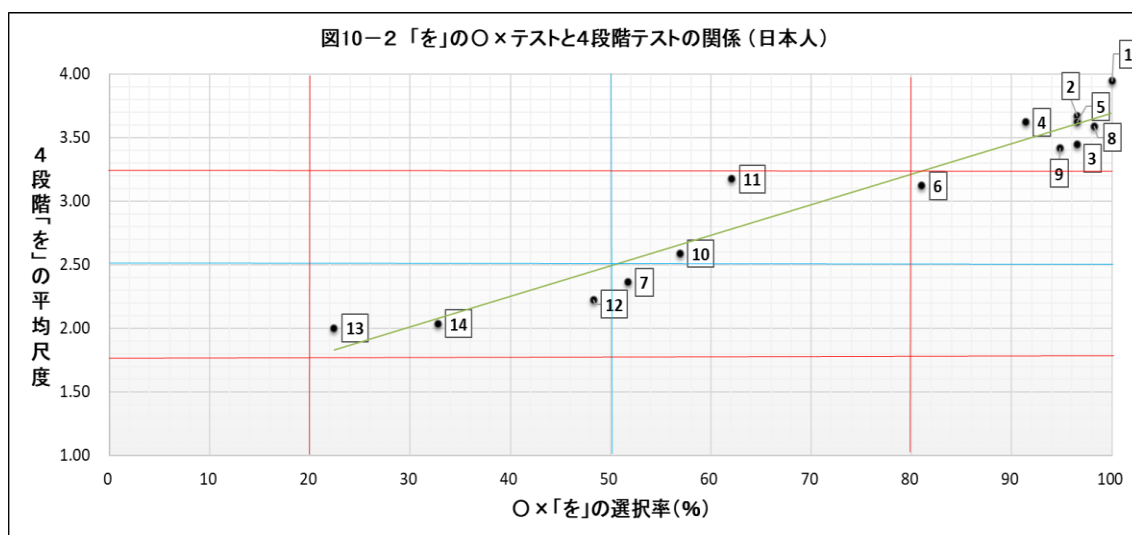
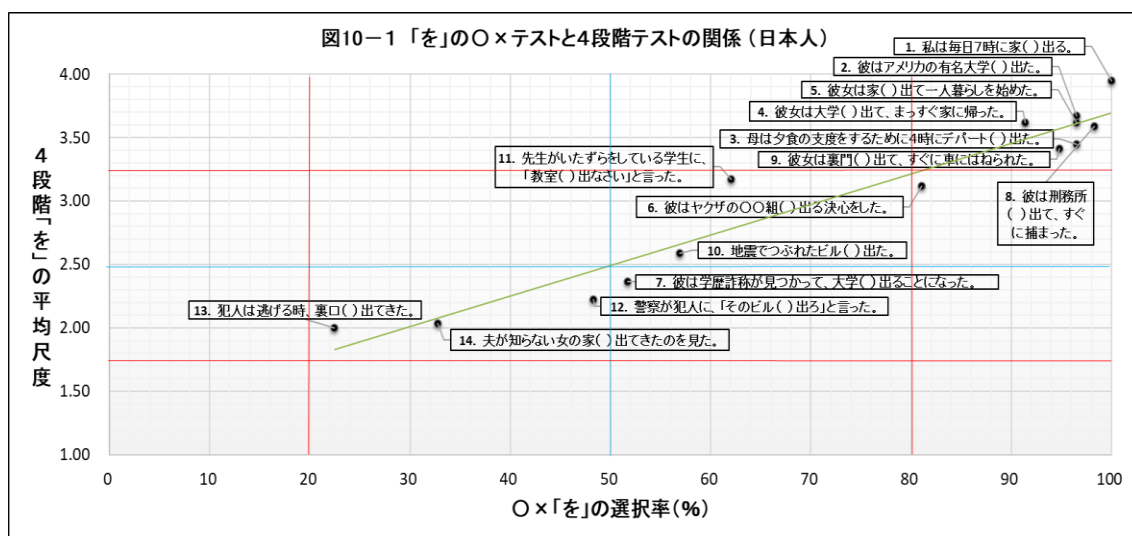
7.4 「から」の二者択一テストと4段階評定尺度テストの関係

図9-1、9-2は「から」の二者択一テストと4段階評定尺度テストの関係を示したものである。これを見ると、図7-1、7-2とほぼ同じような傾向を示していることが分かる。このことから、「正しい」、「少し不自然」、「かなり不自然」、「誤り」のように細かな許容度を見るのではなく、「正しい」、「誤り」のように大まかな許容度を見るのであれば、○×テストでも4段階評定尺度テストでもあまり変わらないことが分かる。



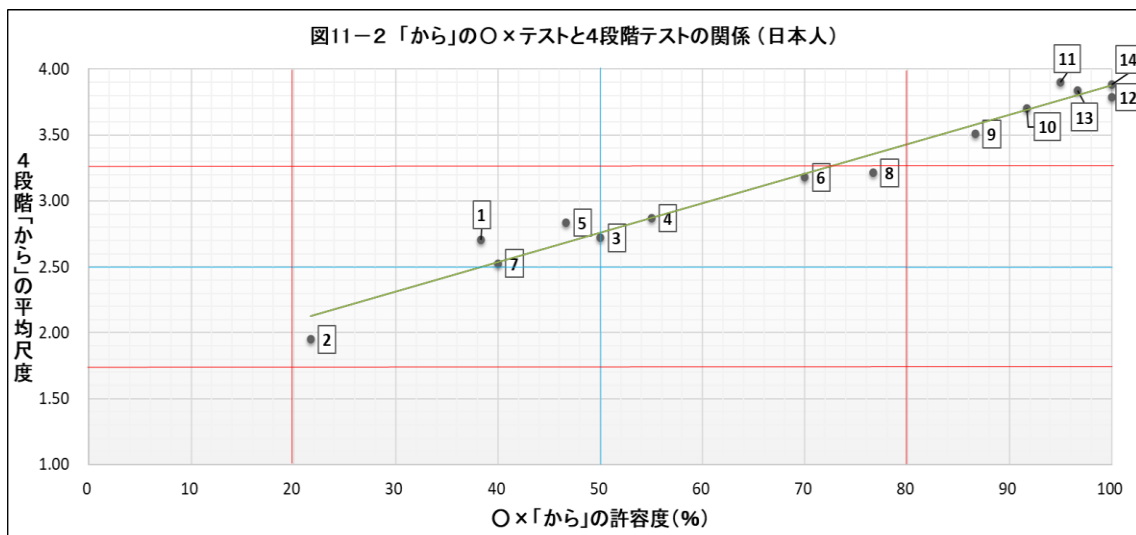
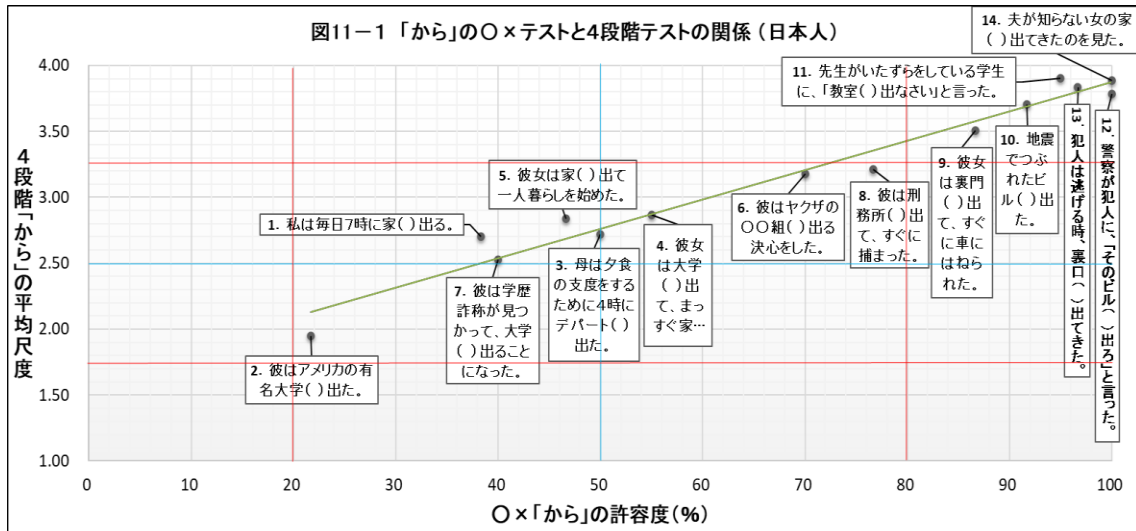
7.5 「を」の○×テストと4段階評定尺度テストの関係

図 10-1、10-2 は「を」の○×テストと4段階評定尺度テストの関係を示したものである。これを見ると、各点は線形近似曲線に沿って並んでおり、○×テストで許容度の高いものは4段階評定尺度テストでも許容度が高く、○×テストで許容度の低いものは4段階評定尺度テストでも許容度が低くなっている。このことから、7.3 節でも述べたように、「正しい」、「誤り」のように大まかな許容度を見るのであれば、○×テストでも4段階評定尺度テストでもあまり変わらないことが分かる。



7.6 「から」の〇×テストと4段階評定尺度テストの関係

図 10-1、10-2 は「から」の〇×テストと4段階評定尺度テストの関係を示したものである。これを見ると、各点は線形近似曲線に沿って並んでおり、〇×テストで許容度の高いものは4段階評定尺度テストでも許容度が高く、〇×テストで許容度の低いものは4段階評定尺度テストでも許容度が低くなっている。このことから、7.5 節でも述べたように、「正しい」、「誤り」のように大まかな許容度を見るのであれば、〇×テストでも4段階評定尺度テストでもあまり変わらないことが分かる。



8. まとめ

以上、本稿では「二者択一テスト」、「〇×式正誤判断テスト」、「4段階評定尺度テスト」の三種類のアンケート調査を利用して、日本語母語者における選択率と許容度の関係について論じた。その結果、「二者択一テスト」と他の二つのテストは一定の対応はしているものの、許容度や選択率が下位の部分でばらつきが見られることや、「〇×式正誤判断テスト」の許容度と「4段階評定尺度テスト」の平均尺度は似たような傾向を示すことを指摘した。

付記 本稿は 2022 年 12 月 17 日に韓国外国語大学・オンラインで開催された韓国日本語日文學會 2022 年度冬季国際学術大会での発表をもとに執筆したものである。

[参考文献]

- 楠本徹也(2002)「「を」格における他動性のスキーマ」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』28 号, 東京外国語大学留学生日本語教育センター, pp.1-12
- 杉村泰(2005)「起点を示す格助詞「を」と「から」の使い分け」『ことばの科学』第 18 号, 名古屋大学言語文化研究会, pp.109-118
- 杉村泰(2016a)「中国語話者における〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について」『日語教育与日本学研究—大学日語教育研究国際研究会論文集(2015)』, 華東理工大学出版社, pp.1-4
- 杉村泰(2016b)「日・中語話者における起点を表す格助詞「を」と「から」の選択傾向の違いについて—二者択一テストと〇×テストの比較—」『日語偏誤与日語教学研究』第 1 輯, 日語偏誤与日語教学研究会、浙江工商大学出版社, pp.3-20
- 杉村泰(2020)「〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について—三種類のアンケート調査の結果から—」『東アジア日本学研究』第 3 号, 東アジア日本学研究学会, pp.85-93
- 三宅知宏(1995)「ヲとカラー起点の格標示」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上)単文編』くろしお出版, pp.67-73
- 三宅知宏(1996)「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110 号, 日本言語学会, pp.143-165